

## 令和3年度 外部評価懇談会議事録

○日 時 令和3年9月16日 10:00～12:00

○会 場 オンライン (Teams) 開催

○内 容 「本学入試種別と入学後成績データの分析」

○出席者 (外部評価委員)

菊池重雄氏 (玉川大学 名誉教授・特任教授)

川島啓二氏 (京都産業大学 共通教育推進機構客員教授・初年次教育センター長)

杉谷祐美子氏 (青山学院大学 教育人間科学部教育学科教授)

(本学)

島田昌和理事長、島田燐子学園長、櫻井隆学長

福井勉副学長 (教学担当・内部質保証委員長)、亀川雅人副学長、

上村佳世子副学長、鶴浦裕外国語学部長、新田都志子経営学部長、

椛島香代人間学部長、川良徳弘保健医療技術学部長、

喜多見康経営学研究科委員長、桑子順子外国語学研究科委員長、

小栗俊之人間学研究科委員長、望月久保健医療科学研究科委員長、

横田素美看護学研究科委員長、小林剛史 GCI センター長・総合研究所長、

山崎敦教務部長、飯島史朗学生部長、木村浩則学長補佐、藤谷克己学長補佐、

浜正樹学長補佐、各学部教務委員長 (池田芳彦教授、野川健一郎教授、

文野洋准教授、西方浩一准教授)、各学部入試委員長 (大野和巳教授、

渡部吉昭教授、藤本薫教授)、絹川直良全学教養教育委員長、

馬渡一浩広報委員長・大学ブランディング推進委員長、清水直樹高等学校長、

水上茂中学校長、島田美紀中学副教頭、竹内秀和副理事長・法人事務局長、

森岡俊也統括ディレクター・本郷キャンパスディレクター・法人副事務局長、

森村幸夫統括ディレクター代行・ふじみ野キャンパスディレクター、

橋本博幸法人総務部長、波佐間雅光事務センター長、

佐伯透キャンパスディレクター代行、吉村郁夫キャンパスディレクター補佐、

築取清キャンパスディレクター補佐、角田千春キャンパスディレクター補佐、

田中綾子キャンパスディレクター補佐兼戦略企画・IR推進室長、

三俣正治学生支援センター長、五十嵐康雄学生支援センター長、

岩坪充雄学生支援センター長補佐、大島拓也戦略企画・IR推進室長補佐、

石村友二郎特任助教、佐々木稔教務マネージャー、須永清美教務マネージャー、

山下和宏教務マネージャー、石井賢一郎社会教育マネージャー、

星野樹教務マネージャー、中村光昭教務マネージャー (記録)

### 1. 挨拶・進行方法説明 (副学長 福井 勉)

本年のテーマは「本学入試種別と入学後成績データの分析」であり、2017 年度に入学し今年春に卒業した学生の入試データおよび在学中の成績推移の分析を全学で初めて行ったものである。今回、Microsoft Power BI という新しい BI ツールを用いたが、今後、我々のツールとして有効なものとなると思っている。ご参加頂いた 3 名の外部評価委員の先生方のご意見を賜り参考にさせて頂く。また、関係各位にはデータ分析のご協力に感謝を申し上げる。

## 2. 各学部からの報告

### [1]外国語学部（渡部吉昭入試委員長）

資料に基づき、外国語学部の分析結果と対応策が報告された。

分析結果 以下について報告・分析を行った。

- ・入試種別 GPA（全学部共通部分）
- ・入試種別 TOEIC 点数（入学時と学年別推移）
- ・入試種別 TOEIC 点数（在学中最高点の平均）
- ・入試種別 TOEIC 点数（入学時、最高点、向上幅）
- ・入試種別留学割合
- ・入試種別就職率全般
- ・入試種別就職率（上場企業とグループ企業への就職率）

まとめ

合格基準再検討、入試種別への対応や初年次委員会で 2 年次についても対応策を鋭意検討している。

### [2]経営学部（大野和巳入試委員長）

資料に基づき、以下の経営学部の分析結果と対応策が報告された。

- ・偏差値分析及び入試と教育へのインプリケーション
- ・GPA 分析及び入試と教育へのインプリケーション
- ・在籍状況別 GPA 分析及び入試と教育へのインプリケーション
- ・PROG 分析と教育へのインプリケーション
- ・まとめ（対応策）

入試種別による就学意欲と潜在能力のある受験生の割合を増やすこと。初年次教育を通じ修学意欲の維持につなげて GPA を上げる。入学後の教育・指導として初年次が鍵であり、少人数の PBL を中心にした授業を行う。

### [3]人間学部（文野洋教務委員長）

資料に基づき、人間学部の分析結果と対応策を学科別に報告された。

- ・入試種別 GPA 推移としての学科別特徴
- ・累積 GPA は、学科による入試種別の特徴

- ・授業満足度の学年別特徴。

入試データと学修指標との関連

- ・評定平均と累積 GPA の相関係数について
- ・授業満足度と GPA との関連性について
- ・4年間で卒業できない学生への対応について
- ・国家資格試験得点率と各指標との相関関係について

今後の展望

学科別に、入試種別による学修成果に特徴がある。特徴を踏まえた教育効果の的確な検討によりキャリア教育を含む教育実践の改善が期待される。他の到達度指標および就職先アンケート指標の導入、アセスメント・ポリシーの再検討を課題とする。

#### [4]保健医療技術学部（藤本薫入試委員長）

資料に基づき、保健医療技術学部の分析結果と対応策が報告された。

分析結果

- ・入試種別学生数の内訳
- ・出身高校の所在地などの分析
- ・入試種別における GPA 値分析
- ・入試の選択科目別分析
- ・科別に選択科目の内訳について
- ・入試得点分析
- ・入試種別における PROG 結果
- ・入試種別における授業満足度
- ・入試種別在籍状況と国家試験現役合格率について
- ・学科別に在籍状況と国家試験現役合格率について
- ・今後の入試戦略や教育内容について

既に行ってきた入試科目検討、学習意欲を維持して専門職を目指すことができる人材を見出すための面接評価の改訂。入学前教育継続や学習サポート拡充の検討や、目指すべき専門職像を明確にした人材育成の必要がある。

#### [5]GCI（小林剛史 GCI センター長）

冒頭に、今回の分析は、GCI 生が全学部に跨っており、また対象人数が少ないとの前提はあるが、平等に扱っていきたい旨の説明がなされた。

- ・入試種別と4年間 GPA 推移および累積 GPA について
- ・入試種別と GPA 分析：高校偏差値との関係
- ・入試種別と GPA 分析：高校時欠席日数との関連
- ・入試得点率と累積 GPA

- ・学部別高校時欠席日数、授業満足度の学年推移
- ・高校時欠席日数と累積 GPA
- ・入試種別と PROG リテラシーと PROG コンピテンシー
- ・まとめ

GCI は学部横断型の副専攻のような教育プログラムであるが、対象者は外国学部と経営学部が圧倒的に多い。入試種別による募集の有効性が認められ、学年進行と、授業内容の充実度について検討した。

### 3. 質疑応答

質問 1)

1) 杉谷祐美子先生

AO 入試と推薦入試の比較と評価についてご教示頂きたい。

回答 1)

① 渡部吉昭外国語学部入試委員長

AO 入試は、他大学と同様に事前に志願書や活動報告書を提出して頂くが受験時期により異なる傾向がある。AO 入試では入学前における入学前教育の充実化を図っている。

② 大野和巳経営学部入試委員長

経営学部は AO 入試の際に課題に対するレポート、プレゼンテーション、それに対する学生同士での質疑応答なども行っている。また、ある AO 入試では、志願書と活動報告書に加え、当日行われる課題で評価している。

質問 2) 菊池重雄先生

高等学校卒業程度認定試験などのデータは今回含まれているか。

回答 2) 福井勉副学長

今回の分析データには入っていない。

質問 3) 新田都志子経営学部長

外国語学部と経営学部で相反する入試種別傾向があり興味深い。

回答 3) 渡部吉昭外国語学部入試委員長

入試種別により志望度合いが異なる。志望度合いが高い入試もある。入学までの時間が長い場合には入学前教育を施している。

### 4. 外部評価委員の講評

菊池重雄先生（玉川大学 名誉教授・特任教授）

入試種別調査で分かることがあり意義がある。学生が在籍を続けるか、卒業するか、本人の望む就職ができるか、私は、米国流に「教育パイプライン」と呼んでいるが、こうした調査

は答えをだすときの示唆になると思っている。学生が貴学の、ひとつの学部を選ぶ前提に、高校、中学、小学校時代の過ごし方がある。高校毎の分析も必要であろう。現在の入試制度では、コンピテンシーを高く伸ばせる学生を取ることが重要であり、AP をきちんと伝え、AP に基づいて学生を入学させることが何よりも必要である。2 年生の GPA が下がる傾向は、ここ 30 年来言われ続けており、アメリカ合衆国などでも同傾向が見られる。大学では、2 年生に力を入れる必要がある。一方、3・4 年生で上昇するのは、ゼミが上手く機能しているか、或いは就職を控え職業意識に連動して勉学意識が蘇ってくるのではないかと思う。また学生の在籍継続率・卒業率・就職率を測る変数は非常に多い。適者生存的な考え方（教育におけるダーウニズム的な考え方）で大学に入学してきているのか、それとも全く意識せずに入学しているのか、また高校までの学習スタイルも重要な変数である。さらに、入学説明会のあり方は極めて重要であり、もっと積極的に Web を使っても良いのではないかと思う。Google とも検討したが、高校生はそもそも冊子などの文書を見ない傾向にあるので 20 秒あるいは 1 分以内の動画を検討する必要があるかも知れない。さらに、学習支援のあり方、例えば一番近い存在の教職員の関わりが在籍・卒業に影響してくる。学生を大きく飛躍させるには、在学中にもっと多様な価値観を伝え、自分で選ばせる指導方法が望ましいのではないかと思う。そのために、DP をどの様に学生に 4 年間掛けて伝え続け、それをカリキュラムの中で作っていくのか、そしてカリキュラムだけでなく、それをどの様に課外で伝えるかがポイントとなると思っている。

川島啓二先生：京都産業大学 共通教育推進機構客員教授・初年次教育センター長

非常に詳細なデータに圧倒された。今日の分析は、入学前・在籍時・卒業時データを照らし合わせるものであったと思う。その間にある、どういう学生を育てるのか、どういう教育が行われているのか、ということは取り敢えず置いておいて、その両方を繋ぎ合わせて傾向を見ることに興味を持って拝見させていただいた。BI ツールの利用も勉強になった。いずれ AI を使って学生の一人一人について辿るルートが予測でき、個別対応が可能な時代になると思う。そうなれば、アカデミック・アドバイジングが非常に重要になるが、質保証と教学マネジメントの関わりがどうなるか、難しい問題がでてくると思う。学生個別の歩む道を予測しながら、フォローする学習者個々に応じた教育になると思う。文京学院大学は、その点を特徴にすれば良いと思う。また経営学部で初年次をテーマとしていたが、初年次教育も単に高校から大学への移行という言葉で片付けられるものではなく、学生の履歴、入試種別も偶然ではなく学習履歴が関係している。初年次教育も多様化を迫られ、非常にきめ細かな対応をしていかなければならず大変だと思う。またデータを詳細に伺っていると時々相反するデータもあったと思う。例えば、どの大学も一般入試で入学した学生の GPA が高いということは言われるが、逆のデータもあった。これらの微細なデータを活かすことができれば素晴らしいと思う。壮大なファクトブックがあり、これをみれば学生一人一人のことが全て分かる。これを活用して新しい領域に踏み出すのかと感心しながら伺っていた次第である。

杉谷祐美子先生：青山学院大学 教育人間科学部教育学科教授

各学部から非常に詳細な資料をご提示いただき、大変な勉強となり御礼を申し上げます。これまでの分析をベースに入試改革やカリキュラム改革に着手されようとしていて、分析に留まらず、改革面で実行され機動性があり素晴らしいと感じた。青山学院大学でも入試改革を行っているが、入試改革は非常に難しい。理念先行で進めても理念通りの成果が得られるわけではなく、志願者の志願動向を予測するのは難しい。ただ、志願者数だけで方針を変える舵取りはできない。最低でも入った学生達がどのような成績をとり卒業していくかみていかないと判断は難しいだろうと思う。貴学では大学に適応し好成績を取める学生もいるので、入試種別に加え教育要因でどの程度成績が分化していくのかが次の分析になるのだと思う。少し変数を追加して分析するとより深い知見が得られるのではないかと思う。

先日日本教育社会学会では、興味深い研究があった。退学に関する発表で、かなり大規模な調査で海外とも比較したものである。米・英等と比較して、日本の場合は、退学要因として学業的な要因が大部分を占めるという不適応型の学生と、心理社会的要因で不適応を起こしている学生が、他国より多いという結果であった。今後の改革の提案にあったように、早い段階からの学業面・大学生活での適応支援をどう作り出すかが1つの重要なファクターだと思う。入試のパターンが非常に多様で、教職員の負担も大きくコストも掛かると思う。AO入試の選抜方法を伺っても大きな負担となっていると感じた。さらに、授業の少人数化、探究型の学習を入れると負担は大きくなるだろう。改革は、ついつい新しいものを取り入れがちだが、足し算だけでなく引き算も大事で、どこを何で代替できるのかをお考えになられたら良いのではと思う。最終的に大学生にどういう力を身に付けさせ成長させるのかが一番大きな点である。PROGのリテラシーはGPAと相関があるのだろうと思う。一方、コンピテンシーはあまり相関がないのだろうと報告を伺って思った。そうであるならば、卒業時に学生にどのような能力を身に付けさせ、どの水準までもっていか目標設定した時に、GPAだけの分析で良いのかということに関わってくる。最終的にどのような成果指標に基づいて分析されるのかも検討して良いのではないかと思った。

##### 5. コメントを受けて（櫻井隆学長）

外部評価委員の先生には詳細なるコメントをいただき心から感謝を申し上げます。色々な意味で大学を良くしたいと考え改革を行っているが、定員確保も重要であり、それとどのように関りを持たせるか常に考えなければならない。外部評価委員の先生方にいただいたコメントで、私自身が重要であると思ったことは、菊池先生のコメントでの入試種別で分析の重要性、また、川島先生がコメントされた高校時代の履歴の違いの分析の必要性である。従って、学生を見る時は、高校時代の履歴、そして、入試種別、更に初年次教育、3・4年ではゼミである。ポイントとなるのは2年次であり、外国語学部の様に初年次・2年次の委員会を設けたのは参考になるのかと思う。川島先生から、入学前から学生個々に応じた学修指

導というのが本学の特徴・差別化となるのではないかとのお話があったが、入学前の学生を把握し、どのような成長過程を辿っていったのか十分に把握していかなければならない。杉谷先生から、同じ入試でも成長には差があるとのお話があったが、それも個々の学生をみていく必要がある。本学としても個々の学生を入学前から卒業そして卒業後までどの様な成長過程を辿ったのかを、トータルで把握し分析する必要がある。優秀な学生が社会に出て必ずしも成功するとは限らない。今後、この点は大学改革での大きな指標になるかと思っている。本日は多方面からコメント・講評をいただき、今後、どの様に活かせるかが我々の課題でもある。本日は大変有難うございました。

以上をもって令和2年度外部評価懇談会が全て終了し、福井副学長が閉会を宣言した。